

---

# 西風

日比谷碌樹

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

西風

### 【Nコード】

N3402N

### 【作者名】

日比谷碌樹

### 【あらすじ】

意地の張り合いからなぜか同居することになった守門と阿夜。自分に対する過度な保護者意識を改めさせ、ひいては自立を認めさせようと、阿夜は過激な「作戦」を思いつく。その一方、彼女のボーイフレンドである黎もまた、穏やかならぬトラップを守門に仕掛けていて……。今回の敵は「修験道」？ それとも――。考古学者・諸橋守門シリーズ第四弾。

## プロローグ（前書き）

完全に日比谷の趣味で書いてるシリーズです。今回はほとんどラブコメです。

「センロ」以外読んでねえよという方が大半だと思いますが、すみません、スルーの方向で……（汗）

## プロローグ

黎が訪れた時、青年は、巨岩の上で仰向けに眠っていた。

温い西風が吹いた。鳥が鎮まり、四方を囲む森のざわめきが止まる。青年の目が開き、ゆっくりと起き上がった。

「やべえ——またここで眠っちまったのか。爺様にばれたら折檻ものだな」

そう言いつつ、大して狼狽もしていない風にのんびりと伸びをする。それでようやく、彼のそばに佇む来客の姿に気づき、声をかけた。

「よう、来てたのか。起こしてくれりゃよかったのに」

青年の奇妙な装束——白いＴシャツに同色の袴という恰好に、黎は含み笑いを漏らした。

「相変わらずだね。自由闊達……君らしいな」

青年はぼりぼりと頭を掻いた。

「特にポリシーがあるわけじゃねえけどな。今日はなんだ？ 妙に神妙な顔して。旅にでも出るのか」

黎は驚いたように彼を見た。

「当たり前。よくわかるね」

「なんだか、そんな風情だったからさ。で、今生でのお別れの挨拶ってやつか？」

黎は首を横に振った。

「あいにく、それはもう少し先だよ。ただ……しばらく留守にするんだけど、実は君に頼みがあつて」

黎はジーンズのポケットからなにかを引っ張り出すと、目の前の友人に差し出した。

「君に預かっていて欲しい。近いうちに彼女が来るから、そうした

ら渡してあげてよ」

青年は、黎に手渡されたものを親指と人差し指でつまみ上げ、まじまじと見つめた。

「なんだこれ……変な形だな。おい、破れてるのか？　ここんどこ」  
黎は謎めいた微笑を浮かべた。

「ただし——なるべく、気づかれないようにね」

## 第一話 同棲？

ことの起こりはこうだ。七月も終わろうとしていた金曜日の夜、八時からの出勤時刻に合わせて家を出たという阿夜あやに、私は偶然、駅で出会った。私の方は彼女とは逆に、大学での作業を切り上げて帰ってきたところだった。

阿夜は驚いたように私を見た。ここは彼女のアパートの最寄り駅ではないので、驚きは私も同様だった。

「あれ、お兄ちゃん。いま帰り？」

「ああ。君は……これから仕事か」

阿夜はこくんと肯いた。

「八時からなんだけど、その前にこの近くに住んでる友達の家へ寄って、前、約束してたDVD借りてきたんだ。そしたら思ったより遅くなっちゃって」

「友達？ この近所に？」

「うん。お兄ちゃんもいちどうちのお店で会ってと思うけど、覚えてない？ 臣じんさんて人」

「臣？ もしかして……こう、短髪でサングラスをかけてた、二十代くらいの……」

記憶を探った先にたどり着いた人影は、モデルのような長身痩躯で、大型のサングラスをかけた今時の若者の姿だった。何ヶ月か前に「カバレ・ガルシアキャバレ」を訪れた時、阿夜がメインで接客を努めていた相手だ。彼らのテーブルが妙に盛り上がっていたので、私はなんとなく覚えていた。いや、別に、それがおもしろくなかったからというわけではないが……。

「そうそう、その人。黎とも仲良くてね、変わってるけどおもしろい人なの」

阿夜はまたも楽しげな様子だ。それから慌てたように言った。

「やば、遅刻しちゃう。あたしもう行くね。じゃあお兄ちゃん、またね、お疲れ！」

「あ……ああ」

踵を返して駆けていく阿夜。陳腐な表現だが、白く長い脚がまるでカモシカのような。私ははっとして、その後ろ姿に思わず声をかけた。

「阿夜、待ちたまえ」

階段を昇ろうとしていた阿夜は、私の声に振り向き、怪訝そうに戻ってきた。

「なに？ 急がないと、開店時間に遅れちゃうんだけど」

私は、咳払いをひとつしてから告げた。

「つまり、前から思っていたんだが……君の服装は少し露出度が高すぎる。どうしてそんな挑発的な恰好ばかりするんだ」

予期せぬ言葉だったらしく、彼女は呆気にとられた表情で私を見ている。阿夜が着ているのはピンク色の袖のないシンプルなワンピースに、ウエスト部分を黒のベルトで巻いたもので、デザインが特に華美というわけではないが、とにかく丈の短さが気になるというか、つい目が行ってしまう。

「そうかなあ……別に、これくらい普通だと思うけど。恵良<sup>えら</sup>なんかもっと派手なやつ着てるよ。ほら、この前、お兄ちゃんも会ったでしょ、チューブトップの——」

「ほかの子は問題じゃない。それに君も、仕事ではもっと裾<sup>ガルシア</sup>の長い服を着てるじゃないか」

多少、おせっかいな発言だったのは認めよう。しかし、阿夜も気の強い現代っ子らしく、やや語気荒く言い返してきた。

「裾の長いって、だってあれドレスだよ？ それもアンティーク調の。あんな恰好普段できるわけないじゃん」

「とにかく……そういう、太ももが出るような短い丈の服はやめなさい。いいね」

阿夜はいつになく怖い顔になって私を睨んでいる。

「お兄ちゃんねえ、いい加減にしてよ。そんなね、女の子の服装にいちいちだめ出しする男つていちばん嫌われるんだよ。全管理したいんなら女房にでも言えればいいじゃん。あたしはお兄ちゃんのペツトじゃないんだからね」

彼女の言葉に、私は少なからずショックを受けていた。親の心子知らずとはこういうことか。

「生意気言っんじゃない、阿夜。——大体、本当は私は、君の勤め先だつてどうにか容認してるんだぞ。ああいう衣装でなければ、すぐにでも辞めさせてるところだ」

ここで、どうやら阿夜はキレたらしい。私を睨んだまま、荒々しく吐き捨てた。

「冗談じゃないわよ。辞めさせるつて、お兄ちゃんになんでそんな権限があるの？それに、辞めたらあたしどうやって生きてくのよ。お兄ちゃんがお嫁にでももらつてくれるわけ？」

私は（自分でも驚いたことに）即答した。

「ああいいとも！私のところへ来ればいい。それで万事解決じゃないか。そうと決まれば、いますぐ店を辞めてこい！」

完璧に「売り言葉に買い言葉」という状態だった。が、こうなったら自分が先に折れるわけにはいかない。私は負けじと彼女を真正面から睨みつけた。阿夜もまったく怯む様子を見せない。

「わ……わかつたわよ。そのかわり、あたしの生活一切面倒看てもらうから。あとで後悔したつて遅いんだからね」

「望むところだ」

異様な空気の中で対峙する私たちを、乗降客らが気味悪そうに避けて通っていく。

——そんなわけで、この日の夜から、私と阿夜の奇妙な共同生活が始まったのである。

その日、守門<sup>すもん</sup>は大学から帰宅するなり、開口いちばんに宣った。

「阿夜。アパートから持ってきた服を私に見せなさい」

「謹慎中」のためやることもなくソファに寝転がって雑誌を読んでいた阿夜は、突然の命令に眉を寄せた。

「……へ？　なんで？」

「なんで、じゃない。君がうちに来ることになったそもその原因を忘れたのか。いいから早くここへ持ってきたなさい」

阿夜は露骨に顔を歪めた。――そもその原因があるとしたら、それはお兄ちゃんの異常な監視癖のせいでしょ、という本心はむろん口には出さなかった。重い腰を上げ、やがて両腕に一抱えの衣類を携えてリビングに戻ると、それを取りあえずカーペットの上に置いた。守門は素材を確かめるような素振りで一枚一枚を手取る。まるで発掘現場さながらである。阿夜は呆れ気味にその姿を見守った。

「持ってきたのはこれで全部だけど……」

デコラティブなレース刺繍が特徴のキャミソール、レザー生地のマイクロミニスカートにフリルたっぷりのラップスカート、黒のシヨートパンツ、ひざ上十センチのニットワンピースなど、活動的な阿夜らしい傾向のデザインばかりである。しかし、守門は苦々しげに首を横に振った。

「まったく……どれもこれも露出度の高い服ばかりじゃないか。やはり、購入するものも私がすべてチェックしないとだめだな」

生真面目な――すでにそういうレベルを超越しているとも言える

――幼なじみの言葉に、阿夜は心底げんなりした顔を見せた。

「着れる服<sup>もの</sup>ないじゃん。あたし、とりあえずなに着てればいいのよ」  
険のある言い方に守門は顔をしかめた。

「可愛げのないやつだな。とにかく、週末にでも一通りまともな服を買いに行くとして……いまのうちはこの中から適当に選んで着ていなさい。裸でいるわけにもいかないしな」

「なにそれ。家の中でならいいわけ？」

「私が見るだけならかまわないだろう。なんとも言うが、不特定多

数の人間に対して、無防備にアピールをすることが問題なんだ。君はそのところをよく考えて……」

阿夜は耳を塞いで言い捨てた。

「あーもう、お説教は聞き飽きたってば！ わかったわよ、今後重々注意します」

「阿夜、待ちなさい。本当にわかっているのか？ 大体君はだない」

阿夜の我慢に限界が来た。床に散らばった衣類を手早くかき集め、胸に押し当てると足音も荒々しくリビングを出て行く。自室にとあてがわれた六畳の洋間にそれらをぶちまける。同時に言いようのない悔しさがこみ上げてきた。

「ム力つく……超ム力つく！ なんてあたしがこんなこと言われなきゃいけないのよっ」

守門に聞こえないようあくまで小声で毒づきながら、お気に入り洋服たちをしみじみと眺める。週末が明けたらおそらく焼却炉行きだ。このままでは。

なんとかしなきゃ……パイプベッドに腰掛け、両手で頬杖をつき、思案に暮れる。やがて、ひとつの策が暗雲の彼方に閃くのを彼女はとらえた。あまり気の進まない手段ではあったが。

代官山駅前徒歩二分の場所に建つファッション関係の専門学校に恵良は通っている。今日は三時で講義が終わるといので、私たちは駅ビル一階のセルフカフェで待ち合わせしていた。店内に入るとすでに恵良が窓際の席に座っているのが見えた。私は手を振り、とりあえずアイスコーヒーを注文し、受け取ってから彼女の元へ向かった。

「ごめん、恵良、お待たせ」

「いいよ。あたしも五分钟前くらいに来たところ」

そう言う恵良の顔に意味深な笑みが浮かんでいる。

「ほら。例のもの、持ってきたよ」

反対側のスツールの上に置いてあったそれを恵良は小指に引っかけ、持ち上げた。私は目を輝かせた。

「恵良すごい、対応早！ サンキュ！」

「話したらさ、その人面白がっちゃって。ぜひどうなったか結末教えて欲しいって。ていうかあたしも知りたいんで、後日レポよろしくね」

私は曖昧に肯きつつ、手渡されたピンク色の紙袋を抱きしめてみせた。

「ありがと、超助かる。こんなことのために買いにくくなったし」

恵良は自信満々に宣言した。

「あたしが超選りすぐって選んだんだから効果は保証するよ。ただし汚したらお買い上げね」

「了解、どうせちよつと袖通すだけだし。明日にでも返せると思う」  
恵良は肯き、チョコレートでたつぷりとコーティングされたドーナツにあんぐりと噛み付いた。すっかり飲み込んでしまってから、感慨深げにこんなことを言い出した。

「でもさあ、先生って意外に独占欲強いタイプなんだね。古風？」

恵良の言葉に私は眉をしかめた。

「ど……独占欲って、それちよつと違うんじゃない。たんに亭主関白……いやじゃなくて、仕切り屋なんですよ」

「そうなの？ じゃあまだHはしてない？ 二人」

私は固まった。アイスコーヒーがまだ半分残っているグラスを、もう少しで取り落とすところだった。

「阿夜？」

「……するわけないでしょ！ いくら恵良でも怒るよ、その発言はなんとも言っただ、私とお兄ちゃんはそのいう関係じゃないの。幼なじみで兄妹なの！ 大体ね、もしそんな感情があったら、一緒

「なんて暮らすの絶対無理だし」

恵良は、私の剣幕もどく吹く風で、のんびりと指についたチョコクリームを舐めている。

「そうかなあ。あたしなら逆だけだね」

「逆って、なにがよ」

「だからあ、Hしてもいいって思えるような人とじゃなきゃ、一緒に暮らすのなんてそれこそ無理だよ。だってきもくない？ そんな相手がいつもそばにいるの」

私は黙り込んだ。一理あるような気もするけど……いや、違う違う。

私とお兄ちゃんは、お互いそんな感情はないけど、その代わり肉親としての愛情がある。だから恵良が言うような嫌悪感はないし（当たり前だ）、喧嘩から始まったとはいえ、別に本気で憎しみあつてゐるわけじゃない。

とは言っても——ああいう監視癖はお兄ちゃんの負の一面だと思うし、正直ちよつと、はつきり言つてうざい。私を心配してくれてゐるのはわかっている。でも、私だっていい加減もう大人なんだけどなあ。

「まあでも確かにあり得ないよね。阿夜には黎君がいるんだから。先生も相当恰好いいけど、考えてみたらけっこう年離れてるし」

「……まあね」

「ていうか、いま黎君旅行中なんだよね。あ、バイトなんだっけ。このこと知ってるの？」

恵良が顔を覗き込むように訊ねてきた。

「うん。この前メールしといた」

「黎君のことだから、普通だったでしょ。超越してるもんねえ彼」

「うん……」

私は曖昧に肯いた。

普通っていうか——黎は知っていたのだ。私が教えるより先に。いつもの如く霊視したのだろうけど……。



## 第二話 阿夜のミッション

午後、メールで連絡があった通り、お兄ちゃんは六時過ぎに帰ってきた。遅い日は深夜を廻ることもめずらしくはないから、今日はかなり早めに切り上げてきたのだろう。

「ただいま」

「お帰りなさい。お風呂にする？ 食事にする？」

私はエプロン姿で彼を出迎えた。お兄ちゃんは、そんな私の態度があまりに意外だったのか、なんども瞬きして私を見つめている。

「なに？ やだな、そんなに見ないでよ」

私は含羞むようにつぶやいた。ドラマでよく見る新妻のお決まりのせりふだったけれど、お兄ちゃんの動揺を誘うには充分だったみたいだ。靴を脱ぎながらそばそばと言うのが聞こえてきた。

「いや…… どういう風の吹き回しかな、と思って」

「だって、ほら、あたしただ飯喰いなわけだし、これくらいしてもいいかなって。久々にちよつとがんばっちゃった」

その言葉には嘘はなかった。料理は嫌いではないけど、得意と言うほどでもない。まして普段は外食の機会も多く、凝った——というかまともなメニューなど滅多に作ることはない。そういう意味でも今夜は特別なのだ。

「先に汗流したら？ 暑かったんじゃない、今日」

「…… ああ、じゃあそうするよ」

首を傾げながら浴室へ向かうお兄ちゃんに、私は悪戯っぽく声をかけた。

「お背中、流せなしましょうか、旦那様」

「ばか」

お兄ちゃんは赤くなって振り返った。私は舌を出してみせ、それからキッチンへ引っ込んだ。

三十分ほどしてお兄ちゃんがお風呂から上がってきた時、ダイニングテーブルには、すでに食事の支度ができあがっていた。レパトリーの少ない私に作れる最上級のメニュー——さばの味噌煮、肉じゃが、茸の炊き込みご飯、大根と油揚げの味噌汁、酢の物系の小鉢。それに二人分のグラス。お兄ちゃんが感嘆の声を上げる。

「へえ、すごいな。阿夜もやればできるんじゃないか」

「そんな大したもの作ってないから、あんまり言われるとちょっと恥ずかしいんだけど。でもお兄ちゃんて和食党でしょ、絶対」

「うーん……特にこだわりはないけど、そう言われれば確かにそうかもしれないな」

いただきます、と手を合わせてから、お兄ちゃんは早速肉じゃがに箸を延ばした。そして満面の笑顔を見せる。

「旨い。——正直、見直した」

「ほんと？ よかった、実は自信なかったんだ」

私は缶ビールを開け、冷えたグラスに注いだ。一口飲んだところでお兄ちゃんが訊ねる。

「西行君には食事を作ったりしないのか」

「えっ……うん、まあ、外食が多いかな。黎と会う時は」

「ふうん……若いカップルなんてそういうものかな、現代は」  
いまどき

私は曖昧に笑った。黎の方が料理は抜群に巧く、家食の場合はほぼ例外なく彼が腕をふるっているなんて言おうものなら、またお兄ちゃんのお説教が始まるのは目に見えている。

「西行君と言えば、いま東京にはいないみたいだな」

私はびっくりしてお兄ちゃんを見た。「え？ なんで知ってるの」  
お兄ちゃんは、蛸と胡瓜の酢の物を口に運びながら答えた。

「いや、実は一週間くらい前に彼と偶然会ったんだ。JRの……どこの駅だったかな。ホームで声をかけられてね。二週間ほど泊まりのバイトに出かけるから、その間阿夜をよろしく、みたいなことを言ってた」

「ふうん……」

「ただ、どこへ行くのかは訊きそびれたんだが。阿夜は聞いているのか」

私は箸を口に含んだまま言った。

「どこって言うてたかなあ……なんか山に登るとかって聞いた気がするんだけど」

「山？　じゃあ登山客相手の山小屋のアルバイトかな。ちょうどシーズンだし。……阿夜、それは舐<sup>ねぶ</sup>り箸だぞ。やめなさい」

お兄ちゃんは目ざとく私を注意した。私は大きなため息をついた。  
「もう……子ども扱いするのはやめてって言うてるのに。あたしもう二十一なんだから」

「そんなことはわかってるさ。だけど、私にとってはいつまで経ったって君は妹なんだ。だから言わずにはいられない。君も、宿命だと思っ<sup>て</sup>てあきらめるんだな」

お兄ちゃんにしてはめずらしい、どこか悪戯っぽい口調に私は少々面食らった。つい、負けじと反撃してしまう。

「あたしのことよりもさ、お兄ちゃん、そろそろ自分の心配しなくていいの」

「え？」

私は、お味噌汁椀に口をつけ、わざとゆっくりすり込んでから言った。

「結婚。そういう予定ないの？　ていうかお兄ちゃんてフリー？　基本的に」

お兄ちゃんの箸が止まる。私はかまわずに続けた。事実、興味があつた。

「あのお姉さんとか、付き合う気はないの」

お兄ちゃんは箸を置いた。どうもまずいことを言ってしまったらしい。

「……小宮山君のことか。彼女は、ただの後輩だよ。そういう対象として見たことは一度もない」

やおら気まずい空気が漂う。それを払拭しようと、私は焦って別

の方向に話を振った。

「じゃあさ——好きなタイプってどんなの？　どういう子が好み？」  
戸惑ったように私を見るお兄ちゃん。

「そんなこと訊いてどうする」

「兄を思う妹心よ。あたしの知り合いにお兄ちゃんまわりのタイプに当てはまる子がいたら、紹介してあげようと思ってる」

そう言って、取り繕うように笑う私。お兄ちゃんはグラスに残っていたビールを飲み干すと、ぼつぼつと語り始めた。

「そうだな……女性らしくて貞淑で、思慮深くて、おとなしくて、私には決して口答えしない。常に一歩下がったところで私につき従うような……」

あまりに古すぎる女性観に私はどん引きした。「げ……まじ？　それ」

お兄ちゃんは澄ました顔で私を見ている。

「いけないか？」

「別にいけないはないけど……やっぱお兄ちゃんてドS……いや、古風なんだね」

怒るかと思いきや、彼はさも可笑しそうに笑い出した。

「まあ、要するに、阿夜とは正反対のタイプってことさ」

「ていうか、そんな子現代日本にはいないから。なにげに失礼だし、お兄ちゃん」

私の言葉に、お兄ちゃんはまた笑った。なぜかすごく楽しそうだった。お喋りをしながらの夕食は思いのほか長く、食卓を片付けた時には九時半を過ぎていた。食器を食洗器にかけ終わると私は言った。

「あたしもシャワー浴びちゃおうかな」

リビングでくつろぐお兄ちゃんの声が聞こえた。

「ああ、そうしなさい。夜更かしは良くない。君はいつも深夜まで起きているようだが、そういう生活習慣も、この機会に見直した方がいいな」

「……うん、そうね」

私は反論せず、につこりと——私の位置からはその笑顔は彼に見えないことは承知で——肯いた。

いまに見てなさいよ、お兄ちゃん。

バスを出ると、水分をしつかり拭き取ってから、ダマスクローズのタルカムパウダーを全身に叩いた。化粧水と美容液を念入りに施し、アップにしておいた髪を下ろす。そして、脱衣所に用意しておいたピンクの紙袋から、中身を取り出した。——いよいよ出陣だ。

「あつーい。かえって汗かいちゃったかも」

手団扇でばたばたと顔に風を送りながらリビングに入ってきた私をなにげなく見たお兄ちゃんが固まった。

「どうかした？ お兄ちゃん」

私は、きょんとした表情を装って彼の前に立った。予想通り、お兄ちゃんは目を剥いてしどろもどろに怒鳴った。

「あ、阿夜！　なんて恰好だ、なんだその……いかがわしい、し、下着は！」

「いかがわしいって……これベビードールって言うんだよ。超かわいいでしょ。似合う？」

私はわざとらしくポーズを取り、微笑を浮かべた。ベビードール——私たちぐらいの年代の女子なら誰でも知ってる、エロ可愛い系ランジェリーの代表格。透け感のある白いサテン生地を使っていて、キャミソールの胸元にはたつぷりのフリルとピンクのリボンがついている。前開きデザインなのでへそ出しどころかお腹は丸見え。そしておそろいのヒップハングタイプのショーツ。今夜の闘いのために用意した、いわば戦闘服だ。

お兄ちゃんは腰を抜かさんばかりに——と言ってもカーペットに直接胡坐をかいてはいたけど——後退った。文字通り、必死に顔を

背けながら怒鳴る。

「あ……阿夜、ばか、ちゃんと服を着なさい、早く！」

「着てるじゃない。家の中なら文句ないんでしょ」

私は努めて平然と言い返した。私だってこんな恰好は死ぬほど恥ずかしい。一刻も早くまともな部屋着に着替えたいところだ。でも、私も意地だ。自由を堂々と勝ち取るためにも、ここは絶対に退くわけにはいかない。

ちなみに言っておくと、これはもちろん私物ではなく、昼間、恵良から借り受けた品だ。ヘアメイクのスクールに通う彼女にはいろんな変わった知り合いがいて、その一人であるランジェリーデザイナーの男の人の事務所から調達してきてくれたのだ。

で、私はお兄ちゃんへと歩み寄った。ここからが勝負だ。彼に気づかれないように、ごくりと生唾を飲み下す。

「お兄ちゃん……」

可能な限り色っぽい声をひねり出し、腰を落とす。立てひざをつき、お兄ちゃんの眼前へゆつくりと迫った。お兄ちゃんはあらぬ方角を向いたまま、咳払いをした。

「阿夜——悪い冗談はやめなさい。そのくらいにしないと私も怒るぞ」

「……怒っていいよ。お兄ちゃんに怒られるの、ほんとが好き……もつと阿夜のことかまって……」

自らを一人称でなく名前で呼ぶのなんて小学校以来だ。なぜか冷静にそんなことを思う自分がいた。お兄ちゃんの方は冷静どころではなく、すでに首筋から耳朶まで見事に真っ赤だ。ちよつと気の毒な気もしたけれど、もうあとには退けない。

私は覚悟を決め、彼の首もとに顔を寄せると、そつと唇を押し付けた。まるで風邪でもひいたみたいに汗ばんだ熱い皮膚の感触がダイレクトに伝わってきた。——こうなると根競べである。どちらが先に根を上げるか。もちろん私に退却の意思などない。私はさらに攻撃を続けた。首筋からあごへ、そして頬へと、離したり吸い付い

たりしながら唇を移動させる。躊躇はあったけれど、耳朵を舐め、軽く歯を立ててみた。……効果はてきめんだった。

「あつ——や……やめなさい……やめないか……阿夜」

彼は聞いたこともないような悩ましげな声を出した。どうやら耳はお兄ちゃんの弱点のようだ。私は重点的にそこを「責め」た。というより、それ以上の手は思いつかなかったのである。さすがに、いくらなんでも、唇に——お兄ちゃんにマウス・トゥ・マウスのキスをすることは躊躇われた。となると、この攻撃をいつまで続けるか。陥落が目的ではもちろんなく、あくまで、お兄ちゃんに、私との同居に対しての無理を感じさせるための作戦なのだから。

「お兄ちゃん、可愛い……大好き……」

言葉とは裏腹に私も焦ってきていた。そろそろ手が尽きそうなのだ。とはいえずでに戦傷は充分という気もする。ここいらが引き際か。私は決断し、彼の頬に摺り寄せていた頭をゆつくりと起こそうとした。その時だった。

「えっ……ちよっ」

不意に、荒々しく両の二の腕を攫まれ、思いきり前方へ——胸元へと引き寄せられた。そのまま背中腕に腕が回され、強く抱きしめられる。と思ったのもつかの間、お兄ちゃんは私の身体を一旦離し、今度は素早く顔を近づけてきた。いままでに見たこともない表情がそこにあつた。濡れた唇から、どこかつらそうな掠れ声が漏れた。

「阿夜……」

思わぬ反撃だ。男であるお兄ちゃんに本気になられたら私も逃げ切れない。——やばい、やり過ぎた！ 私は無力にも目を瞑っていた。

しかし、次の展開はあまりに意外だった。

「う……うわああつ」

お兄ちゃんの、殺されそうな悲鳴が聞こえ、そして同時に私はものすごい力で突き飛ばされていた。

「きやあつ」

私はフローリングの床に転がされ、呆氣に取られてお兄ちゃんを見た。なにが起こったのかよくわからなかった。……ていうか、なにいまの悲鳴？

「お……お兄ちゃん？ ど、どうしたの？」

お兄ちゃんは後ろ手についてどうにか上体を支えながら私を凝視している。額には脂汗が滲み、顔色は蒼白だ。

「……………阿夜」

やっとのことでそれだけつぶやくと、彼は口元を手で押さえながらのろのろと立ち上がった。そして無言のままリビングを出て行った。隣の寝室兼書斎のドアが開き、それから閉じる音がした。

誰もいない空間に向かって私は言った。

「なんなの……………一体」

むろん、返ってくる言葉などなかったけれど。

### 第三話 霊場にて

開講二時間も前の大学構内はひどく静かだった。都内とは言え敷地内に緑が多いせい、空気もどこかひんやりと肌に心地好い。守門は事務所に立ち寄って研究室の鍵を受け取ると、教授棟へと重い足を引きずりながら向かった。

部屋にたどり着き、とりあえずコーヒーを淹れる。ちょうど二杯目を飲み干す段になって、入り口の扉が開いた。顔を出したのが後輩の哉子<sup>かなこ</sup>ではなく師である山際<sup>のほろ</sup>暢だったので、我知らず安堵のため息が漏れた。

「おお、諸橋君<sup>もろはし</sup>。私がいちばん乗りかと思つたのに、ずいぶんまた早いな」

「おはようございます。教授こそ、こんな時間に来られるなんてめずらしいですね。コーヒーは？」

「ああ、もううよ。少し薄めにしてくれ」

守門からマグカップを手渡された山際は、彼の愛弟子の尋常でない様子に眉をしかめた。

「君、顔色が悪いぞ。それになんだね、その歌舞伎役者みたいなクマは」

「いえ……少し寝不足なもので……」

守門は憂鬱に答えた。事実、昨夜は一睡もできなかった。阿夜を残して寝室に引っ込んでからも混乱と惑溺は収まることはなく、むしろ増幅して彼を苛んだ。

阿夜の天使のような微笑、悪魔のような仕草、あまりに官能的な唇の感触、甘い薔薇の香り、ほとんど裸のような下着から覗き見える素肌、引き寄せたやわらかな身体、そして「西行黎」。守門は再び頭を乱暴に振った。あれは幻覚などではない。確かに我を失って

いたかもしれないが、あの時、阿夜に口づけをしようとして彼女の顔に唇を近づけた時、阿夜ではない、彼の知る男がそこに現れたのだ。

——あれは阿夜の恋人である西行黎に間違いなかった。

黎の話題が出ていたから？ それとも、黎という存在を無視して、不覚にも阿夜に手を出しかけた自分の良心の為せる業？ いや、そんな生易しい錯覚の類ではなかった。そうだ、香りさえ違っていた。芳しい薔薇のはずが、どういうわけだか燻した煙のような胸苦しい臭いに変化していたのである。しかし、一瞬のちには、黎の姿もその臭いも消えていた。阿夜の不審そうな顔が自分を見ていた。正視できず、今朝も彼女が起き出さないうちにと早々に家を出てきてしまった。

あれは、一体……なんだったんだ。

堂々巡りが始まりかけた時、山際ののんびりと明るい声が彼を現実へと引き戻した。

「そっぴゃあ聞いたぞ。安寿君あんじゅと同棲してるんだってな、いや君にしちゃ進歩だ」

守門は飛び上がらんばかりにして背後を振り返った。足早に山際へと近づき、低い声で詰め寄る。

「……教授。一体、誰からそれを」

山際はにやにやと教え子を眺めた。謹厳実直、堅物、生真面目を絵に描いたようなこの青年の狼狽する姿は実に見ものだ。

「なに、昨日『ガルシア』へ寄ってね……最近安寿君がいないんでどうかしたのか訊いたら、あのふわふわとした金髪の……そうそうエラちゃんて子が教えてくれたんだよ。彼女も中々好いねえ、どうにもつかみどころのない雰囲気で。なんというか若いのに、往年のモンローを彷彿とさせるよ」

ご満悦な表情を浮かべる恩師に、守門は盛大なため息を吐いた。

「しかし、そういうことなら私に一言言ってくればいいのに。君も水臭いな」

「そういうことって……教授、誤解されてますね。ぼくは別に――」  
「いや、いまさら誤魔化さなくてもよろしい。それで？ 式はいつ頃挙げる予定だね。なんなら私が仲人を引き受けてもいいんだぞ」  
「教授。ぼくの話聞いてください。ぼくはですね、阿夜に再教育を施すためにしばらくうちに引き取っただけです。あれは少し世間知らずというか、危なっかしいところがありますから……ですから同棲でもなければ、まして結婚なんて、そういう方向の話ではまったくありません」

額に青筋を浮かび上がらせて一気にまくし立てる守門だったが、山際は対照的に穏やかだ。

「君、女性に対して再教育を施すというのは、これ即ち結婚するということだよ。『源氏』然り、『ピグマリオン』然り、古今の例は枚挙に暇がない。たとえ始まりははつきりとした恋慕の感情からではなかったとしても、その帰結するところはみな同じだ。違つかね」  
「……………」

山際の言葉には妙な重みがあった。守門は反論に詰まり、にじみ出る汗を必死で拭う。

「しかし……私は彼女にとっては兄のようなものです。私にしても阿夜はあくまで妹みたいなもので……」

山際は人差し指をゆっくり振ってみせた。

「みたいなもの、だろう。それこそ昔から言うじゃないか、筒井筒、妹背の君とね。恋人に発展する前の、いわば普遍的なプロトタイプのようなもんだな」

守門は絶句して師匠を見つめた。山際はさらに続ける。

「大体、私から言わせれば、世間知らずなのは彼女ではなく君の方だと思うがね。彼女は確かに奔放だが、聡明だ。君がいなくても遅く生きていくだろうことは想像に難くない。だが……」

山際はちらりと守門の顔色を見、とどめを刺すかのごとく言った。

「君はどうだね。彼女がいなくても生きていけるのかね」

窓辺に立つ師の姿がちょうど逆光に包まれ、眩しさに守門は目を細めた。そして口を開こうとした時、研究室の扉が開いた。

「おはようございます。あら、お二人とも、今朝はずいぶん早いんですね」

入ってきたのは哉子だった。山際が愛想良く——というべきか、調子良く彼女を出迎えた。

「ああ、おはよう、小宮山君。いや、どうも昨夜寝苦しくてね。朝方まで寝付けないんで、早めに来てしまったよ」

哉子も、そのない笑顔を浮かべながら応じる。

「熱帯夜でしたものね。私も昨夜は一晩中冷房を入れっぱなしでしたわ。先生も、それで？」

哉子の視線が守門に向けられる。しかし、守門はいつにも増して素っ気なく答えた。

「……ああ。昨夜は散々だ」

そのまま哉子を顧みることもせず、部屋を出て行った。悪いとも思ったが、なぜかいまは彼女の声が勘に触って仕方がなかった。

家に帰って阿夜に会いたい。阿夜に触れていたい。昨夜のように——そこで再び現れる黎の無慈悲な幻影に、守門はいつそ泣きたい気分でつぶやいた。

「……あのタイミングは勘弁してくれ」

長野県にある御嶽山は世に知られた山岳信仰の山である。霊山としての歴史は古く、七世紀初期に開山されて以降、修験者や一般民の畏敬を多く集めて来、現在、麓には御嶽教の神殿である御嶽神社を抱えている。しかし、ほとんど人口に膾炙することなくひっそりと存在する霊場中にはあった。ここ、天宗寺もそのひとつで、信者はその大多数が古参の修験者である。真言密教の流れを汲むこの

寺院の長は、慧仙大師けいせんだいしと呼ばれる老いた僧侶であつた。

「――坊、坊はおるか」

穏やかな声が講堂（寺院建築における構造物のひとつ。僧侶が經典の講義や説教をする建物のこと）に響いた。低いがよく通る声だ。鈍色に光るような長素絹ちようそけん（素絹で作る上下一連の法衣。裾の長いものを「長素絹」、短いものを「切素絹」という）の法衣が、その足さばきに合わせて美しい衣擦れの音を立てる。

「大師様、いかがされました」

黒い空衣うつあ（高野山僧徒の平常衣）をまとった一人の僧侶が、回廊から顔を覗かせた。

「円棕えんりようか。坊を見なかったかね。捜しているのだが、どこへ雲隠れしたやら」

「ああ、あれなら、先ほど礼堂にて見かけました。なにやら籠こり中のようでしたが」

なぜか微笑笑を浮かべて答える。大師は呆れたようにつぶやいた。「……やはり。まったく、坊ときたら……思うようには動いてくれぬし、困ったものだ」

「しかし、それも大師様が甘やかされるからでは？　ここへあれが来るたびに、相当な可愛がりようで」

老師は相手を軽く睨にらんだ。凶星なのだ。

「おっと、これは……それでは私めが呼んでまいりましょうか」

空衣の僧侶――円棕が口元をわざとらしく押さえながら進言する。その時不意に、風が吹き込むがごとく、大師の背後になにかが現れる気配があつた。振り向くと、白足袋を履き、白衣を羽織つた黎が済ました顔で立っている。

慧仙大師こと日闇僧徒にちあんは、子どもの悪戯を見つけた父親よろしく、ややきつい声色で彼をいなした。すぐそばに控える円棕の視線を意識したせいもあつたが。

「坊や、悪ふざけはほどにしておきなさい。どうせあれを使つたんだろつが、気が乱れてかなわん」

「大師様、ご心配には及びませんよ。ただ……あまりにおもしろくて、つい」

声を殺して忍び笑いをする黎。本当に、昨夜はなんとスリリングで、楽しい夜だったことか。その様子に、老翁はあきらめたように息をつき、微笑した。

「よほどその者に執心のようだね。お前のそういう顔は、久々に見た気がするよ」

「ええ。魅力的な人です。とてもね」

「お前に魅入られるとは不幸な……いや、それにしても、遊びに使ってはいけないよ。これきりにしなさい。いいね」

そう言い含めると、日闇はゆつくりと僧堂に消えた。黎は申し訳なさそうな顔で、その後ろ姿にそつと囁いた。

「でもね大師様……まだ気づかれていないんです」

臣はうまくやってくれたんだな——黎は堪えきれず、再び笑い出した。

東亞大には、各学部の修学内容に関する学者や専門家といった有識者を外部から招いて講義を行う、招待講師制がある。招ばれる人間の本業は様々で、必ずしもアカデミックな職業に就いているとは限らない。たとえば国文科の授業では話題のベストセラー作家が、また英文科の前例では、卒業生でもあるトリリンガルの女性キヤスターが招請を受けて来校していた。

そして今日、史学科の特別カリキュラムとして、都内の某神社の神主が講義をすることになっている——と守門は聞いていた。単位取得にはそれほど重要ではないが、四限の始まる三時だいぶ前から、使われる予定の教室はおもに女子学生で埋まっていた。

「よっぽど有名な人なのか？ その神主というのは」

二時過ぎ、守門は同じ研究室に所属する院生の一人、寺脇克と空

き時間をカフェテリアで過ごしていた。なにかとまとわりついてくる哉子をうまくかわすのにも、彼は優秀な緩衝材だ。淹れたてのコーヒーをすすりながら守門は訊ねた。

「先生、知らないんですか？ いま、けっこう話題ですよ。いわゆる神主らしくない神主だつて」

寺脇は笑みを浮かべて答えた。優れた容姿、高い知性と教養、スマートな物腰。女性を惹きつける要素をこれでもかと湛えたこの若き准教授は、その実哉子のような勝気な女性の扱いには長けていなかったり、妙に融通が利かなかったり、流行にはとことん疎かったりする意外な一面を持っている。もちろん師として尊敬してはいるが、付き合えば付き合うほど飽きない人だ、と寺脇はひそかに思っていた。

「神主らしくない？」

「ええ。前にテレビで観た時は、なんか、ファッションショーに出演してましたよ」

守門は眉を寄せた。

「ファッションショー？ 神主がか」

「そうなんですよ。流行の最先端っていう化粧と服着て。それがまたすごい似合つてて、逆に、とても神主には見えませんでしたね。だからほら、学内の女の子たち、みんな受講しに殺到してるでしょ」

守門は得心した。なるほど、あの盛況ぶりはそのためか。

「うちの大学で常に出席率九十%<sup>パ</sup>越えなんて先生の授業くらいですけど、あの人がほんとに講師として来たら、いい勝負になるでしょうね。そしたら小宮山先輩も少しは安心するかも」

寺脇の含みのある言葉に、守門は顔をしかめ、咳払いをした。失言に気づき、寺脇は慌てたように腕時計に目を遣った。

「あ、ぼく、もうじきバイトの時間なんで……それじゃ先生、お先に失礼します」

「ああ、また明日」

寺脇が去ったあとしばらくして、守門はカップに残ったコーヒー

を飲み干し、立ち上がるうとした。その時、前方の椅子が無造作に引かれた。傍らに誰かが立っている。

「ここ、いいかな」

守門は顔を上げた。細身で長身の若い男がそこにいた。亜麻色の短い髪はパンクバンドのボーカルのように逆立ち、石の施された大きなサングラスが午後の陽光を反射して煌めいている。守門の答えも聞かないうちに、彼はさっさと椅子に腰を下ろした。

「君……どこかで？」

守門は怪訝に目を細めた。以前に会ったことがあるような感覚を覚えたのだ。案の定、青年は軽くあごを引いてみせた。

「一度、『ガルシア』でね。でも話するのはこれが初めてだよ、先生」

青年はにやりと笑った。親愛の情なのか敵意なのか、その潜める真意がどうにも読めない笑顔だ。

「『ガルシア』？ ……ああ、あの時の……じゃあ君が阿夜の言っていた――」

青年はゆっくりと肯いた。

「一応、自己紹介しておくよ。臣惣一。そついち 本業は都内にある無川神社むかわつてとこの宮司をやってる」

「え？ じゃあ今日の招待講師っていうのは……」

「そう。副業がモデルでね、それがおもしろいってことでいろんなメディアから引き合いを受けてて、でお宅んとこの大学にも招ばれたってわけ」

「なるほどな。……確かに君のようなタイプの宮司はほかにはないだろうな」

守門はしみじみと肯いた。臣は可笑しそうに笑みを漏らした。

「ま、それはいいんだけどさ。黎から先生の話聞いて、ちよつと興味持ってね。先生、民俗史なんかに詳しいんだろ」

臣は手のひらを軽く組んで守門を見つめた。

「詳しいと言えば詳しいが……君も神主なら、私よりも知識は豊富

じゃないのか？ 実地経験もあるんだろうし」

青年は組んでいた手のひらを外し、広げてみせた。

「それがあいにく俺は不良神主でね。うちの爺様にも勘当寸前だし、大学を出られたのも奇跡ってやつさ。で、本題なんだけど」

彼は再び、顔の前で軽く手のひらを組み、続けた。

「影貼かげはりって言うてたかな——聞いたことあるかい？ 先生」

「影貼……？」

守門は眉根を寄せ、その聞き覚えのない言葉を繰り返した。あごに手を当てた時、カフェテリアがにわか騒がしくなった。大学関係者と思われる、数人の背広姿の男たちが現れ、臣を指差して怒鳴っている。

「臣さん！ こんなとこにいたんですか、もうじきに講義開始の時間だつていうのに」

「今日はテレビ局も来ているんですよ。段取りがめちゃくちゃじゃないですか」

臣は頭を振り、面倒そうにつぶやくと席を立った。

「ああ忘れてた。仕方ねえ、ちょっと行ってくるか。……じゃあな、先生」

男たちは臣を取り囲み、嘆くように口々にぼやいている。

「まったく……こつちの身にもなってくださいよ。臣さんとは連絡の取りようがないんですから」

「携帯は持たない主義なんだよ。鬱陶しいからな」

「しかしですね、こういう時くらいは……」

はいはい、と適当に肯く臣の後ろ姿を見送ったあと、守門はもう一度、彼が残した言葉を反芻した。

「影貼……」

……って言うてた……？

## 第四話 レクチャー

臣惣一が講義を行っている教室は、入り口の外まで室内に入りきらない学生たちであふれ返っていた。終講を待って詳細を聞こうと思っていた守門だったが、実際に行ってみると人の多さにその気を殺がれ、仕方なく研究室へと戻ることにした。

具合のいいことに、部屋には山際がいた。小型テレビの真ん前に椅子を置き、なにやら熱心に鑑賞中だ。

「おお、諸橋君。君は例の……なんとかいうタレント神主の講義は聞きに行かないのか」

画面から目を離さずに山際が言う。

「ええ、まあ。……なにをご覧になってるんです？」

山際は含み笑いをしながら守門に振り返る。

「昭和五十年代に浅草にあった伝説のキャバレーのショータイムを映像作品としてまとめたフィルムだよ。資料として寺脇君から借りたのさ、いやあ実に興味深いね。あ、君、コーヒーを淹れるなら私にも頼む」

守門はコーヒーをカップに注ぎながら苦笑した。

「資料って……教授のご専門からは遠すぎるんじゃないありませんか。ブラックで？」

「いや、ミルクも入れてくれ。少し小腹が空いてきた」

冷蔵庫からフレッシュを袋ごと取り出すと、ひとつだけ開封してカップに落とし、山際に手渡す。

「ああ、すまん、ありがとう。小宮山君が今日はもう帰ってしまったのでね、どこに菓子類があるかもよくわからん。君は知らないかね」

「知らないこともないですが……教授、確か最近血糖値が上がった

んではなかったですか」

山際は露骨に渋い顔をした。

「まったく君らは二人そろって私の楽しみを奪う真似を……いいかね、禁欲者の末路などろくなものじゃないぞ。私は現世での享樂を捨ててまで、実存も不明瞭な来世で救われようとは思わんからな」

守門は笑って応じた。ちょうど山際に訊ねたいことがある矢先だったのだ。

「では取引といきましょうか。実は、ご教示いただきたいことがあるんです。……サブレとチョコレート、どちらがよろしいですか」

山際は即答した。「チョコレートをくれ」

先週、アメリカの姉妹大学から研究者が来日した折に置いていた手土産のマカダミアナッツ入りチョコレートを、山際は満足そうに頬張った。コーヒーをさらにすすり込むと、息をついて言った。

「旨い。コーヒーとチョコというのは鉄壁の組み合わせだな。……で、訊きたいことというのは？」

「ええ……それが、ぼくにもよくわからないんですが」

山際は眉をしかめて教え子を見た。

「あ？ そりやどいう……」

「その……ぼくはまったく聞いたことがないんです。不勉強と言われてしまえばそれまでなんです……」

「ふむ？ なんだね、そりや一体」

「影貼、という言葉なんですが」

守門は自信なげに言った。それは優秀な研究者として知られる彼にはきわめてめずらしい態度だった。

「なんだって？ カゲバリ？ 影日向の影に、ハリは——障子を貼るとか、あの貼るって字かね」

守門は肯く。「と、思われます。断定はできませんが」

「ふむ……影貼ねえ……影貼……」

山際は、埋もれた記憶を手繰り寄せるような遠い目をした。

「むかーしなあ……全国の霊場巡りが趣味の男が知り合いにいてな。

そんなような言葉というか、話を聞いたことがある」

「というと、修験道の用語ですか」

山際は手を振ってみせた。

「いやいや、よくは覚えていないんだよ。うる覚えの話なんで、あまりまともに取らないでくれ。……ただ、その男が言うには、ある道具に靈威を込めることで使う……呪いの一種とでも言うか」

山際は学者の顔になってあごを撫でた。

「おそらくは形代かたしろの一形態だろうが、現代、いわゆる大袈おおはらえなどに使う形代とは違う。はっきりとした呪詛の媒体だな。それを使うなら本人には気取られないように持たせなきゃならん。そこがこの手の道具の難しいところだ」

守門は言った。

「影貼……も、そういった道具のひとつなんでしょうか」

山際は首をひねった。

「調べないことには断定はできないがね。だがなあ、調べると言っても……紙に残っている資料などはあるかどうか。少なくとも私はこの道に入ってからこの方、その男に聞いた以外では目にしたこと  
も本で読んだこともないがな」

守門は肯いた。なにしろ彼自身、これまで耳にしたことのない言葉である。

「で、その影貼ですが……どんな形状をしているのかはご存知ですか？ 形代かたしろの一種だとすれば――」

「ああ、君の言いたいことはわかるよ。しかし形については聞いた覚えがないんだ。人型の紙あまがつ、天児あまがのようなものかどうかは、これだけの情報ではなんとも言えん」

人の穢れや災禍を祓うために用いられる形代も、幼児のための魔除けのお守りである天児あまが、這子ほっこも、基本は人形である。影貼がその流れを汲むものだとするれば、やはり人の形をしていると考えるのが自然ではあるが……。

「そうそう、こんなことを言ってたぞ。その修験者だがね、影貼を

使ったことがあるだかないで、しかし使いこなすことは難しい、自分には修行が足りないよね。そりゃあそうだろう、他人への呪詛なんてものは百害あつて一利あるかなきかだ。しかも道具を使うならなおさらだな」

守門は師を凝視した。山際はコーヒを一口含み、息をついてから続けた。

「考えてもみたまえ。影貼は——これが呪詛の道具と仮定しての話だが——呪いをかける相手にあらかじめ渡しておかなければならないんだよ。だがそれは、逆に言えば、呪いをかけた当人の方には、相手がいまちゃんとそれを附帯しているかどうかはわからないということになる。呪詛返し之余地もそこから生まれる」

「というと、手元に置くことで相手を苛む……といったような性質の呪具ではないんですね」

「呪いの藁人形かね？ 違うね。フレイザーの言う類感呪術でも感染呪術でもない。敢えて言うなら、非感染呪術——まあ相手の身体に附帯していることが前提で可能となる呪詛なのだから、非感染と言いつけるのは乱暴な気もするが。とにかく重要なのは、あくまでその男の言うことを信じるならだが、この呪法の靈威はプラセボなどではない、ということだ。実行した結果になにが起きたのかは、いまとなつちや知る由もないが」

守門は腕を組み、あごに手を当てて思案を始めた。その姿に興味をそそられた山際が訊ねる。

「しかしなんだって君は、そんな言葉を……一体どこから聞いたんだね。それに、調べなければならぬ理由でも？」

あの男は——臣はこう言っていた。「影貼って言ってたかな」。それに彼は阿夜とも接触している。そして、いま、東京には西行黎がいない。……黎は、どこへ行くと言っていた？——山へ？

「諸橋君？」

山際は怪訝な表情を浮かべた。守門は、額に手を当て、あらぬ方向を見つめている。

「諸橋君、どうかしたのかね」

「……いえ。ありがとうございます。大変参考になりました。教授、ちよつと急用を思い出したものですから、今日はこれで失礼してもよろしいですか」

常ならぬ弟子の様子に、山際は戸惑いながらも許しを出した。守門は身支度を整えると、すぐに研究室を出た。向かった先は、むろん例の教室——臣惣一の元だ。

「帰った？」

肩透かしを喰らい、守門は思わず声を上げた。

「しかし……まだ四時過ぎじゃないか。通常の講義は一時間半のはずでは……」

大学の事務所で広報を担当しているその男は、情けない顔で肯いた。

「もちろんその予定でしたよ。だけど今日はなんだか気分が乗らないからって、三十分以上も早く……テレビ局の人たちはかえって喜んでましたよ、授業風景が純粹に撮りたいわけじゃないんでしょからね。あの人らしいから演出として使えるって……まったく、こっちは振り回されっぱなしですよ」

終講後も教室に残っていたらしい女子学生たちが、いつの間にか周囲に集まり、口々にさんざめいている。

「超かつこよかったけど、めっちゃ気まぐれな人ですよ。話はわりとおもしろかったけど」

「えーそう？ あたし、なに話してんのかよくわかんなかった」

「ていうか遠すぎたよねえ。それにやっぱ、諸橋先生の方が全然恰好いいし」

派手な嬌声が上がった。その中の一人が守門に抱きつかんばかりにして話しかける。

「ねえ先生、もう帰っちゃうんですか？ あたし、質問したいこととかあるし、ほかの子も訊きたいことあるみたいだから、どうかお茶とか行きませんか？ みんなで」

「あ、それいい！ 先生、行きましようよ、たまには生徒に付き合ってください」

守門は短く応じた。

「すまないが、今日は用事があるんでね。今度、私から誘うよ。それじゃあ」

そう言つて足早に教室を去る守門に、女子学生たちはとろけそうな視線を送っている。自分から誘うといういまのせりふを担保に、絶対に彼をアフタースクールに引っ張り出すのだ。あれほどのレベルの男は滅多にいないのだから。

「でも謎だよね、諸橋先生って。彼女とかいるのかなあ」

「研究室の小宮山女史って人？ やっぱ付き合ってるの、あの二人」  
姦しく騒ぎ続ける彼女たちの中から、そつと抜け出した学生がいた。手元に携えた水色の紙袋の紐を握り締め、なにかを決断したかのような厳粛な顔つきで、音もなく教室を出て行った。

## 第五話 嫉妬

玄関チャイムが鳴り、阿夜はインタフォンを覗いた。守門にしては早すぎる時間帯だ。モノトーンの画面の中央に、見知らぬ若い女の子が心もとなさそうに頬を染めながら立っている。出ていいものかどうか迷ったが、とりあえずチェーンを外し、ドアを開けた。

「……あの……ここ、諸橋先生のお宅じゃ……」

阿夜の姿を見て動揺したのか、口ごもるように小さくつぶやいている。ストレートの長い黒髪、縁の細い眼鏡、白い清楚なブラウスにグレーのフレアスカート。阿夜と同世代くらいの、しかし阿夜とは正反対のタイプの娘である。

阿夜は我に返り、慌てて言った。

「えっと——諸橋先生……いやお兄ちゃん、まだ帰ってないんですけど……」

娘の目が意外そうに見開かれる。

「え……お兄ちゃん？先生の、妹さん……なんですか」

阿夜は答えに詰まった。この女の子に自分たちの関係を明かしていいのかわか、判断がつかなかったのだ。

「えーと、その……あの、あなたは……」

言葉を濁しつつ相手を窺うと、彼女ははっとした様子で答えた。

「あ、すみません。私、先生のゼミを専攻してる者です。先生、教室に忘れ物しちゃってたんで、届けに……来たんですけど……でも、そうですね。こんな時間じゃまだ帰ってらっしゃらないですよね、お忙しそうだったし……」

阿夜は彼女の手元に目を落とした。水色の紙袋の中に、フィールドノートらしい緑色の表紙が覗き見えた。そして、その横に、なにかの包みが——洒落た色遣いの包装紙で包まれたなにかが収まっていた。阿夜の心臓が、なぜかにわかにざわめいた。

「じゃあ、あの……申し訳ないんですけど、これ、先生に渡しても

「えませんか」

娘が差し出した紙袋を、反射的に受け取ろうとした時だった。耳に馴染んだ革靴の足音が廊下に響くのが聞こえた。阿夜はつぶやいた。

「お兄ちゃん」

怯えたような声が同時に上がる。「えっ——」

「——君、此葉君？ どうしたんだ、こんなところで」

怪訝そうな表情の守門がそこに立っていた。彼女の顔が見る間に赤く染まる。消え入りそうではあったが、なんとか聞き取れる程度の声を絞り出す。

「あの……あの、今日、先生、一般教養の授業で忘れ物されてたから……それで、私……」

「え？ ああ、それを届けにきてくれたのか？ わざわざ？ なんだ、研究室に来てくれればよかったのに」

娘は口元を押さえて黙っている。守門は紙袋を受け取り、とりあえず礼を言った。

「すまない、ありがとう。助かったよ。……しかし、一般教養の授業って——君は三年生だから、もう受けてはいないんじゃない？」

娘の顔がいまにも泣き出さんばかりに歪んだ。阿夜はとつさにフオローに入った。

「研究室なんてそう気軽に行けるとこじゃないわよ、あのおっかないお姉さんだっているんだし。それに受ける必要はなくても授業を聞くのはかまわないでしょ？ そこ褒めるとこじゃん、お兄ちゃん。つまんない突っ込み入れてんじゃないわよ」

阿夜の物言いに守門は顔をしかめる。

「まったく……もうちょつと言いはないのか、君は。この此葉君の爪の垢でも煎じて飲ませたいものだな」

阿夜は思いきり舌を出してみせた。

「大きなお世話よ。この説教魔！」

「なんだと、この——」

悲鳴を上げてドアの内側へと避難する阿夜。傍らに佇む教え子の視線を感じ、守門はひとつ咳払いすると言った。

「あ……ともかく、わざわざすまなかったね。ありがとう」

そう言うてにっこりと微笑を浮かべる。娘の顔に、やおら安堵とあからさまな思慕の表情が広がっていく。

「よければ寄っていきたまえ、お茶でも……」

守門の言葉に、彼女はものすごい勢いで頭を左右に振った。

「いえっ、とんでもないです。これで失礼します。……先生、あの」

「え？」

娘は守門の目をしっかりと正視し、言った。

「その……妹さん、なんですか。……そちらの方」

「え……」

彼女は、ドアの隙間から顔を覗かせている阿夜をじつと見つめた。守門は口を開こうとして、どう説明したものか考え、言いよどんだ。その微妙な間を阿夜は逃さなかった。

「そうです、あたし、妹です。いま理由があつて一時的に一緒に暮してるの。ねっ、お兄ちゃん」

「——いや。彼女は……」

阿夜は怒鳴るように彼のせりふを遮った。

「妹ですってば。八歳も離れてるから親代わりみたいなものだけど。口うるさいったらないの、毎日毎日説教ばかり。ほんっと厭んなっちゃう。まあ大学じゃネコかぶってるみたいだけど」

「大した言い草だな。説教されるにはそれなりの理由があるんだぞ、わかってるのか」

睨みあう二人の姿に娘は安心したのか、くすりと笑みを漏らした。守門はやや赤面し、再び咳をすると言った。

「じゃあ——阿夜、彼女を駅まで送っていくから。行こうか、此葉君」

彼女は瞳を潤ませて守門を見上げる。阿夜に軽く一礼すると、ぴたりと守門に寄り添って歩き出した。阿夜は二人をしばらく見送

つていたが、やがて、ドアをゆっくりと閉めた。……なぜか猛烈な苛立ちがこみ上げてきた。手当たりしだいに八つ当たりしたいような気分だ。

そして、先ほどの娘が残していった紙袋に目を遣る。緑色のフィールドノートをそつと除け、その隣に入れられた紙包みに手を伸ばす。何回もの逡巡のあと、ようやくそれをつまみ上げ、まじまじと見つめた。包装紙ではなく、ごく小さな紙袋だった。ごくり、と生唾を飲み込む。開けてもわからないだろう、封蝋を模したシールが軽く貼られているだけなのだから。しかし——他人のプレゼント（としか思えない）を勝手に開けるようなことは……それに、どうせあとで守門が開けるのだから、その時に見せてもらえばいい。

その時、阿夜の心の中で誰かが晒った。

——見せてもらう？ あんたプライドないの？ 大体、ほかの誰かに気軽に見せられるような内容の贈り物だとしても？

阿夜の眉がわずかに歪んだ。うるさいな。それならそれでいいわよ、ここでこつそり開けるって行為の方がよっぽど恥知らずでしょ。「誰か」は執拗に囁き続ける。恥知らずでけっこうじゃない。昔から言うでしょ、戦争と恋愛にはルールは要らないって。見たいくせに。ていうより、彼には見せたくないと思ってるくせに——阿夜は頭を振った。

恋愛じゃないし！ ただちょっと気になっただけ。人のもの勝手に見たりとか、あたしは絶対にしない。

阿夜は葛藤をどうにか吹っ切り、つまみ出した袋をまた元に戻した。ほぼ同時に玄関のドアが静かに開いた。

「阿夜？ なんでそんなとこに座り込んでるんだ」

駅から戻ってきた守門が不思議そうに自分を見下ろしている。タ

イミングの良さに、阿夜の身体は大きく跳ねた。

「な——なんでもない。お、お帰りなさい。お兄ちゃん」

「ああ。……そうだ、大事なことを思い出した。阿夜、ちょっとこ  
つちへ来なさい」

守門は玄関マットの上に置かれた紙袋には目もくれずに阿夜の腕  
を引き、暫定的に彼女の自室としている洋間へ入った。わけがわか  
らず、しかし抵抗もできずに阿夜は訊ねた。

「なに？ どうしたの、お兄ちゃん」

守門は部屋中を見回した。ここ一週間ほどの間に阿夜が持ち込ん  
だものは僅かだ。しかし、その中にあるはずだ。おそらくは黎本人  
からではなく、臣を介して彼女に渡ったはずのもの——「影貼」が。  
「阿夜。確かうちに来る前に臣さんに会った、と言ってたな」

「え？ う、うん。それがどうか……」

「その時、彼からなにか預からなかったか？ 或いはもらったりし  
たものはないか」

守門の真意が読めず、阿夜は戸惑いながらも答えた。

「預かるって……別になにも……あ、そうだ」

阿夜はベッドの足元に立てかけるように置いたデニムのスタッフ  
バッグから、一本のDVDを取り出した。

「これ、借りっぱになってたんだ。そういえばまだ観てなかった」

「貸せ」

守門は乱暴に阿夜の手元からDVDを取り上げた。横柄とも言え  
る行為に阿夜は顔をしかめる。それを流し、守門は荒々しい手つき  
でパッケージを開けた。どうやら臣が自分で焼いたものらしく、表  
面になにも書かれていないオレンジ色のDVD-Rが収められてい  
る。パッケージから中身をむしり取ると、なにかがひらひらと床に  
舞い落ちるのが見えた。阿夜はかがみ込んでそれを拾い上げた。二、  
三センチくらいの紙切れのようだ。三角形の、よく商店などで配る  
籤くしのような形をしている。

「なにこれ」

守門の顔色が変わった。阿夜の指先から紙切れをもぎり取って目の前に翳す。そして大きく息を吐き出した。

「……これが……影貼、か」

見た目はただの白い紙だ。いや、どう見てもただの紙切れだ。それ自体に力などはないに違いない。バスの乗車券程度の大きさの、下方部分——どちらが下方なのかは不明ではあるが——に一センチほどの切れ込みが垂直に入れてある。守門はじつと、痛くなるほど目を凝らした。……やがて、ひとつの歪いびつと言ってもいい文字が、その中央に浮かび上がってくるのがわかった。彼はその文字を音誦おんしょうした。

「アン……」

阿夜は守門の手元を覗き込み、眉根を寄せた。「……なんにも書いてないじゃん。なんなの？ これ」

「……やられたな」

「え？ なに、どういうこと」

阿夜にはなにがなんだかわけがわからない。それにはかまわず、守門は続けてつぶやいた。

「オン サンマヤ サトバン」

言い終わるが否か、紙切れはふわりと浮き上がり、空中に融け込むかのように消えてなくなった。力が抜け、守門は床にへたり込んでしまう。阿夜は慌てて彼に手を伸ばした。

「お兄ちゃん、なに、どうしたの？ ていうかあの紙切れ、どこ行っちゃったの？」

守門はのろのろと口を開いた。

「つまり、役目を終えたんで姿を消したのさ。いま頃は持ち主のところへ帰ってるんだろっ、多分」

「持ち主って……え？ もしかして」

「ああ。……西行君ぐらいだろうな、君の身を案じて普賢菩薩の真

言を影貼に託すような人間は」

女性守護のご本尊として知られる普賢菩薩——影貼に封じ込められていたのはその真言に他ならなかった。それを解放することで呪詛は解ける、という確信があったわけでは、もちろん守門はなかった。ともかく、これでやっと、あの夜の文字どおり呪われた記憶から逃れられる——と守門は心底からのため息を漏らした。その様子に、阿夜が戸惑い気味に声をかける。

「よくわかんないけど、黎がお守りをくれてたってこと？ でもそれ、臣さんのDVDに入ってたんだよね」

「影貼は……このお守りは、君にわからないように渡さないと効果を發揮できないんだ。ただ……わざわざ普賢菩薩を選んだってことは、おそらく……」

阿夜のいちばん身近な異性である私への牽制、なのだろうな。守門は胸中でつぶやいた。なんとも言えない心持がしていた。

「まあいい。これで一件落着だな。やっと枕を高くして寝られるよ」  
「……なんか正直わけわかんないんだけど。じゃあいつかの夜、お兄ちゃんが挙動不審だったのもそれと関係あるの？」

守門はぐつと詰まる。

「それは——いまさらどうでもいいだろう。それより、お茶でも淹れてくれないか。フルマラソンでも走り終えたような気分なんだ」  
甚だ納得がいかないながらも、阿夜は言われたとおりにキッチンへと向かった。守門は洋間を出、リビングへ入ろうとして、ふと玄関先に放置されたままの紙袋に目を留めた。二十分ほど前、教え子の女の子を駅へ送る道すがら受けた質問が不意に頭の中でリプレイされる。

——先生、付き合ってる人、いらっしやるんですか。

いないと答えた。本当のことだ。じゃあ好きな人は——？ それにも同じ答えを返した。こちらもちろん本当の——そう、もちろん本

当に決まってるじゃないか。

「お兄ちゃん？ お茶、入ったけど」

阿夜の声がした。妙に素っ気ない口調だ。守門は紙袋を持ち上げ、リビングへ向かった。阿夜はソファの端っこに腰掛けていた。ティールカップを両手で挟み込み、部屋のどこか隅の方を見つめている。影貼のことについてはぐらかされたと感じ、怒っているのだろうか。守門は黙ってソファに腰を下ろした。それを見計らったように阿夜が口を開いた。

「ねえ、忘れ物ってなんだったの」

「え？」

阿夜が、いつになく硬い表情で守門を見つめている。

「さっきお兄ちゃんの学校の子が届けてくれたじゃん。このはちゃんていうの？ 可愛い名前だね」

「ああ、此葉というのは苗字だね。確かにあまり聞かない名だな。

下の名前は…… なんといったかな、ちよつと忘れた」

「ふうん」

微妙な空気が流れる。阿夜は苛ついたように卓上を指した。

「それ。……なに？」

「ああ……」

守門は阿夜に促される形で紙袋に手を入れた。見慣れたフィールドノートと、見慣れない包みに目が留まる。

「なんだ？ なにか入ってるみたいだが……」

薄紫色の瀟洒な紙袋だ。守門はシールを剥がし、中身を取り出した。

ラッピング用のビニール袋に小さなこげ茶色のマカロンが二つ入っていた。それに、折りたたまれたメッセージカードが一枚。じつと見ていた阿夜の心臓がうるさく鳴り出した。

「なんて…… 書いてあるの」

渴いた声で訊ねる。守門は無言でカードを開いた。――そしてすぐに閉じる。

「ねえ、なんて書いてあったの？ お兄ちゃん」

「いや、別に……」

守門は目を合わせずに紅茶をすすっている。それが無性に阿夜の勘に触った。

「見せて、そのカード」

阿夜は乱暴に守門の右手へと腕を伸ばした。驚いたように身体を引く守門。

「阿夜？ やめなさい、なにをするんだ」

「いいから見せてったら。なんで隠すのよ」

「なんでもなにも、君には関係ないことだろう。これは此葉君の私への私信だ、君が見るべきものじゃない」

そんな正論など百も承知だ。阿夜は立ち上がり、卓上のカップを倒さんばかりの勢いで守門の手元につかみかかった。その激しさに守門は言葉を失くし、戸惑い一つも厳しい声で彼女を制した。

「阿夜！ やめろと言ってるだろう。どうしたっていうんだ、突然」「なんであたしに隠すの？ お兄ちゃん、あの子のこと好きなの？」  
ついに阿夜は口走っていた。こうなるともう止まらない。

「この前言ってた、お兄ちゃんの理想のタイプだから？ あたしとは真逆だもんね。もしかしてすでに告られてたとか？」

守門の顔が険しくなる。凶星だったからなのか、それとも阿夜には言われなくなかったことだからなのかはわからないが、阿夜にはすでに躊躇はない。

「違うなら見せてよ、そのカード。ねえったら！」

「阿夜——一体どうしたんだ。なにが気に障るんだ？ 君らしくないじゃないか、やっていいことと悪いことの区別くらいつくはずだろう」

守門の途方に暮れたような声がなおさら彼女を刺激した。

「きれいごとやめてよ。お説教ももうたくさん！ 自分のことは棚に上げて——」

「棚に上げて？ 私が一体いつそんな、君に咎められるようなこと

をしたって言うんだ？」

「したじゃない、この間！」

阿夜は怒鳴った。守門を真正面に見据え、さらに続ける。

「あの夜……あたしに無理やりキスしようとしたじゃない」

痛いところを衝かれ、守門は狼狽した。それでも言い負かされるわけにはいかない。

「無理やりって……あの時は、君の方が迫ってきたんじゃないか。あんなことをされたら誰だって——」

「誰だつてってなによ、あたしはお兄ちゃんだけは信用してるの。」

ほかの男の人の反応なんかどうだっていいわよ。それなのに、あんな……信じらんない。聖人君子みたいな顔してるくせに。最低！」

めちゃくちゃなことを言っているのはわかっていた。だが気持ちを抑えられなかった。なぜここまで苛立つのか、どうして守門を罵倒したいのかもわからないまま、阿夜は怒鳴り続けた。さすがにかつとなつたらしい守門の腕が動いた。

「……いい加減にしろ、このわがまま娘！」

殴られる——身を竦めて顔を伏せた阿夜を、強い力が抱きしめた。あの夜よりももっとずっと激しい抱擁だった。守門は力任せに阿夜を抱き、そして唇を寄せた。幻影も錯覚も見えないほど素早く。

「ん……っ」

予期せぬ行為に阿夜は驚き、その腕の中で反射的にもがいていた。けれど守門は決して逃がそうとはしなかった。徐々に力の抜けていく阿夜の唇をやさしく弄り、なんども舌を絡めた。二分以上も続く長い接吻だった。

ようやく唇が離れた時、阿夜の抵抗はすっかり収まっていた。

潤んだ瞳で弱弱しく守門を見上げている。

「お兄ちゃん……」

守門は微笑み、もう一度、そっと彼女の身体を抱きしめた。耳元で低く囁く。

「落ち着いたか？ まったく……手がかるったらないな」  
「……子ども扱い、しないでったら」  
守門は笑った。

身動きもせず座禅を組んでいた黎の臉がぴくりと震えた。

誰もいない礼堂の中央に据えられた蠟燭の火が揺らめき、消えた。  
どこからか現れた小さな紙切れが、花びらのように頼りなげに舞いながら、やがて黎の手の中に横たわった。人形のような顔がそれを見つめる。彼は声もなくつぶやいた。

呪を返されたな。それにしても……今回の影貼は、予想外の働きをしてくれた。

阿夜の心の奥底に秘められていたなにかまで、一気に解放してしまうとは。

——そろそろ、汐時かな。

黎は、交差させた足を、ゆっくりと解いた。

## エピソード

午前八時前。曇りがちの空模様のためか構内はこの時期としては涼しく、朝早くから来校している人々の気持ちを穏やかなものにしていた。守門もその一人で、七時半には大学に到着し、早々と資料整理に取り掛かっていた。

不意に研究室の扉をノックする音がし、間髪を入れずに意外な人物が顔を覗かせた。ラメの入った黒いＴシャツに、細身のレザーパンツ。腰を何十にも取り囲む分厚いシルバーチェーン。先日、招待講師として東亜大を訪れた、臣惣一だ。

「人気のない学校つてのはいいいもんだな。空気の濁りが少ない」

臣は大きく伸びをするとぞんざいに訊ねた。

「お邪魔してもいいかな、先生」

守門は資料から目を離さずに言った。

「私に、なにか用でも？」

臣は大げさに両腕を広げてみせた。

「先生に会いに来たに決まってるじゃないか。それに先生も、俺に言いたいことがあるんじゃないかと思つてさ」

「いや。私の方には特に君に用はないね」

素っ気ない言葉に、臣はしかし楽しげに微笑する。

「先生。俺はヒントをあげたんだぜ？ そうつれなくしないでもらいたいね」

守門は顔を上げると、真っ直ぐに臣を見据えた。

「私が君のDVDに思い当たると見越してわざわざ影貼のことを教えたとていうのか？ 西行君は君の友人なんだろう。なぜわかつていて裏切るような真似を？」

臣は喉の奥で低く笑った。

「裏切ったわけじゃないさ。黎だつてこういう顛末は予想してたはずだ。俺はただ、先生が気に入っただけだよ。あんたがあんまり彼女……安寿姫にご執心なんで、つい気の毒になっちまって」

「出まかせを言うな。第一君は、私と阿夜の付き合い……というか関係について実際には知らないはずじゃないか」

臣は不敵な笑みを浮かべた。

「野暮だな先生。そんなことは顔を見ればわかるさ。先生がどれほど彼女に惚れてるか、ってことはね」

「なにをばかな……」

語気荒く言い捨てる守門。臣は肩を竦め、言った。

「ま、そりゃ正直どうでもいいんだ。ただ——我を忘れてる人間には隙ができる。いろんなモノたちにつけ込まれやすい隙がね。まじで気をつけた方がいいぜ、先生」

守門は言った。

「神主としての忠告か」

「友人としての良心さ」

そう言い置くと、臣は研究室を出て行った。守門は肩で息をつきはからずも彼のせりふを反芻していた。

——いろんなモノたちにつけ込まれやすい隙、か。阿夜との距離のとり方を、私は間違えているのだろうか。

雲が切れ、強く目映い夏の日差しが部屋いっぱいに差し込んできた。今日も気温は上がりそうだ。

これで、全部……かな。

阿夜はすつきりと片付いた洋間を見回した。たった十日ほどの間暮しただけの部屋だ。なのに奇妙なほどの懐かしさがこみ上げ、波

のように彼女をやさしく包み込んでいた。

滅多に使わない大型の旅行用鞆を引きずりながら玄関へと向かう。靴を履いていると、背後に人の気配を感じた。

「やっぱり、出て行くのか」

玄関に立った守門が、静かな声で言った。

「うん。……お世話になりました。いろいろ迷惑かけちゃってごめんね」

阿夜は、ほとんど洋服と化粧品しか入っていない鞆を持ち上げ、守門に向かって深々と頭を下げた。

「阿夜。私は、その……」

守門は言いにくそうに視線を逸らしながら、それでも口を開いた。「私はかまわないんだぞ。……君がこのままうちにいても」

守門の言葉に、阿夜は笑って首を振った。

「だめだよ、やっぱ。精神的な近親相姦になっちゃうからね」

「え？」

「だから……一緒に暮したらまずいでしょ」

阿夜は守門には聞こえないよう、小声で付け加えた。

——だって、あ那时的お兄ちゃんのキス、めちゃくちゃ感じちゃったんだもん。いまそばにいたら、なんかやばい気がする。

でも、このことは、絶対言わない。言ってあげない。

阿夜は少し幸せな気分ではくそ笑み、胸の中だけでつぶやいた。

……それにあたしも、自覚なかったけど、かなり重症のブラコンみたいだなんて、癪だから当分認めるわけにはいかない。

あたしはあくまで、小姑として、お兄ちゃんの行く末を見届けてあげなくちゃ。

「じゃあね。お兄ちゃん。……また、ガルシアお店でね」

阿夜の最後のせりふを守門は聞き逃さなかった。

「待ちなさい、阿夜。いまなんて言った？ まさか『ガルシア』に復歸する気か？ それは私は聞いてないし、赦すつもりもないぞ！

こら、阿夜、待てと言ってるだろう！ 阿夜！」

阿夜は悲鳴を上げながらエレベーターホールへと駆け出した。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3402n/>

---

西風

2010年10月8日13時37分発行